

書評01

矢守 克也 著

『防災心理学入門 —豪雨・地震・津波に備える』

ナカニシヤ出版 / 2021 年 3 月刊 / 164 ページ / 1,900 円 + 税
ISBN 978-4-779-51543-9

評者：霜永 智弘
同志社大学大学院 社会学研究科 博士後期課程



1. 災害大国、日本

日本は災害大国である。周知の通り、2024 年 1 月 1 日に石川県の能登半島にて最大震度 7 の揺れを計測する大地震が発生し、2024 年 5 月時点でも、既に震度 5 弱以上の地震が計 22 回に及んでいる。このような地震をはじめとして、近年猛威をふるう自然災害による被害を少しでも軽減するためには、災害に立ち向かう人間や社会に関する知恵が重要となる。本書は、こうした知恵の重要性を踏まえた上で、防災意識や災害情報、防災教育、リスク・コミュニケーション、復旧・復興といったテーマをカバーする防災心理学とその基本や最新の話題を一話読み切りのエッセイのスタイルでまとめられている。

2. 本書の論点と議論の進め方

本書は大雨、洪水、土砂崩れ、地震、津波といった自然現象そのものを議論の対象とし、第 1 章では「豪雨災害—逃げるべきか逃げざるべきか?」、第 2 章では「地震災害—南海トラフ地震に備えて」、第 3 章では「津波災害—3.11 を繰り返さないために」が論じられている。また第 4 章「災害心理—『わかったつもり』の一步先」では、自然災害にかかる人間や社会の準備・反応、被災後の回復過程など、防災心理学に関する事柄も議論されているのが特徴である。

本書は上述した通り、エッセイのスタイルでまとめられており、計 64 本のエッセイが収録されるなど、読者の関心を引く工夫をこらした

内容となっている。

3. 雨量予測情報をどのように理解すべきか

もし次のような自然災害の場面に遭遇すれば、私たちはどのように対応できるだろうか。想像しながら読み進めてほしい。ある時「広く社会に目を向けると、信号機の停止による渋滞や事故発生に加え、社会の隅々にまで行き渡ったコンピュータ制御に依存した社会システムが一齐に不具合を起こす。航空機(空港)、鉄道(駅)などが機能麻痺に陥り、宅配、コンビニエンスストアなどの物流システムがダウンする。スマホ基地局や浄配水・排水施設の停止など、他のライフライン系にも影響が及ぶ」。また「家庭では、ポンプや制御機器が止まるので、断水を伴うことも多い。ガス機器も一部使えなくなる。多くの固定電話、エアコン、テレビも、もちろんダメ。そして、現代生活の命綱とも言えるスマホ(携帯電話)もバッテリー切れでアウト。集合住宅ではエレベータ停止の影響も深刻だし、機械式駐車場の場合、車に逃げ込むこともできない。電気駆動の医療機器が必要な人は、直ちに命に関わる事態に直面する」(本書、20 頁)。

上述した甚大な被害は全て、ここ数年の「豪雨災害」によって引き起こされたものである。こうした豪雨災害による被害の一例をはじめ、自然災害は誰が、いつ、どこで、どのように遭遇するのか予測がつかない。それゆえに、このような事態に直面した時に、今、目前に迫る自

然災害がいかなるものなのかを正しく理解するための知識が必要となる。本書では、そうした知識を身につけるための一例として「雨量予測情報」が取り上げられている。以下、次の引用文を参考にして、読者と一緒に考えてみたい。

「明日朝までの24時間に降る雨の量はいずれも多いところで、九州南部で200mm、東海で150mm、九州北部、四国、近畿で100mmと予想されています」（本書、2頁）

日常の天気予報を通じて、よく耳にするフレーズだが、あなたは何をどう考えただろうか。ここでのポイントは、『『雨量の絶対値よりもむしろ、その土地にとって大きな雨かどうか』、すなわち、『『その土地にとって、初めて経験するような、それまでの最悪記録（既往最大）を破るような大雨になるかどうか』』を判断することだということが、本書で示されている。

その理由は、「同じ雨量でも、その土地にとっての深刻さが違って、それが被害の『出る、出ない』に大きな影響を及ぼすからだ」と語る。そうした判断を行うためには「ふだんから参照点となる数値（その1つが観測史上最大値）を知っておくことが大切」で、それにより、『『これまでに経験したことがない豪雨』、『観測史上1位の大雨』を経験する』のか否かを判断することに繋がっていく（本書、24頁）と述べられている。このように本書では、私たちが自然災害という事象について、それをどのようにして理解すべきなのかを考えるためのとらえ方（フレームワーク）が示されており、自然災害が起きた時の心構えと、その具体的な思考方法が指南されているのが最大の特徴といえる。

4. 著者への問いかけ

最後に、評者から著者に対して問いかけてみたい点を述べることを通じて、本書の理解をより高めていきたい。

本書では、しばしば自然災害に備えるための「社会的制度を整備すること」（本書、38頁）や「知恵を出し合う」（本書、8頁）ことの必要性が述べられている。それは、自然災害に対する「危機管理本来の姿」（本書、121頁）が失われてきたことへの危機感にあるということが指摘されている。そして、こうした社会的状況を打破することができるように、著者は「避難スイッチ（避難を実際に行動に移すためのきっかけになること）」や「逃げトレ（津波避難訓練支援アプリ）」、そして、「クロスロード（ワークショップ形式の防災学習教材）」等の仕組みづくりに努めてきたということが述べられている（本書、121頁）。

評者が関心を持ったのは、こうした「避難スイッチ」等の仕組みが、どのような手続きを経て、いかにして設計されたものなのかという点にある。具体的には、①こうした仕組みを設計するための組織体制はいかにして整えられてきたのか、②そうした組織体制をもとに、どのような仕組みがいつ、どのようにして設計されたのか、③そうした設計作業の各段階においては、それに携わる人々の間で、どのような意見や考えが生まれたのか、④そうした人々の意見や考えが仕組みを設計する際に、どのようにして活用されたのかという点である。

上記①から④までの論点を確認すれば、自然災害とその対策手段としての仕組みを設計する手続きにおいて、どのような共通点や相違点が生まれたのかを知ることに繋がるといえるだろう。そして、そうした様々な観点からの理解の積み重ねが、人々によって社会的制度を整備するために知恵を出し合う危機管理の本来の姿を醸成することに、寄与するのではないかと評者は考える。

私たちの日常生活をめぐって、自然災害がもたらす影響力が強くなる中で、本書はそれに備えるための知識を私たちに提供する1冊であることから、幅広い読者に対してお勧めしたい。